

1863年のCharles Dickens

*Mrs. Lirriper's Lodgings*と*The Uncommercial Traveller*の考察を通して

Charles Dickens in 1863

Through a Study of *Mrs. Lirriper's Lodgings* and *The Uncommercial Traveller*

篠田 昭夫

英語教育講座

平成13年9月10日受理

[]

1863年9月13日、エリザベス・ディケンズ(Elizabeth Barrow Dickens)が他界した。享年74歳。その2年以上前から心身共に衰えが急速に進んで、遂に絶命して果てた母親に対して、この時齢51歳に達していたディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)は如何なる想念と感情を抱いていたのであろうか。12歳の時からおよそ40年に渡って間断なく燻り続けていたと想像される断絶感と報復的情念が和らぎ静まり、母親に対する蟠りが溶けて、少しでも許そうという心的姿勢を現出させていたのであろうか。それとも、怨念と妄執を従前通り燃え続けさせていたのであろうか。

思えば、1824年12歳当時父親が債権者の告訴により3ヶ月間収監されていたマーシャルシー債務者監獄(the Marshalsea Prison)から何とか出所し得た後、ディケンズが5ヶ月間も続けたウォレン靴墨工場(Warren's blacking-

warehouse)を辞めることに反対して、勤めを続行するように主張した母親への鬱屈した情念が、1847年に認めた未完成の自伝的手記の中で“ I never afterwards forgot, I never shall forget, I never can forget that my mother was warm for my being sent back ”¹⁾と赤裸々に綴られた有名な箇所
に象徴されるように、ディケンズに程度の差こそあれ付きまとい続けたことは想像に難くない。それは例えば母親の他界の直前に執筆されたといってよい自伝的要素に色濃く覆われた一人称体による長篇である*Great Expectations* (1860-61)の主人公ピップ(Pip)の幼年期が、母親代わりに育ててくれている姉を始めとして、その夫ジョー・ガージャリー(Joe Gargery)を除いて無慈悲で冷酷な輩ばかりの包囲網の中における「重苦しく陰惨な影の下」²⁾にある、という設定より端的に看取できる。更に1861年のクリスマス作品である*Tom Tiddler's Ground*の主人公兼進行役の旅人氏(Mr. Traveller)が、焼き串で止めたぼろ毛布をまとった噂の隠者モウプス氏(Mr. Mopes the Hermit)を眼前にして吐露した“ a Debtor's Prison in the worst time ”³⁾という語句にも同じことが指摘できよう。ディケンズの内面に封じ込められてきた生涯「最悪」の体験とその記憶を、これは指し示しているからである。と同時に、母親をめぐる記憶がその中でも「最も忌まわしく冷えびえとして荒涼とした記憶」⁴⁾であることは述べるまでもない。こういう風に見てくると、母親に対する心的姿勢が徹頭徹尾厳しく苛烈なもの以外の何物でもない事実は否定すべくもない。彼女の死の直前の時期においても。

そうした状況の中で1863年のクリスマス作品である*Mrs. Lirriper's Lodgings*⁵⁾が発表されたのである。しかもタイトルを上記のように定め、その執筆をディケンズが開始したのが9月14日⁶⁾、つまり母親の他界の翌日であった。母親の死に連続させて発表した既婚女性の固有名詞をタイトルに定めた作品に、

前者から作家が受けた影響が多かれ少なかれ投影され反映されているというのは、首肯できる解釈とってよいように思われる。*MLL*は*Christmas Stories*⁷⁾に収録されているクリスマス作品としては16番目の、そして*A Christmas Carol*(1843)から数えると、ディケンズの総計25篇に達するクリスマス物の作品群の中では21番目にあたる作品である。他のクリスマス作品と同じく、本篇も7章立ての構成で、ディケンズを含む6人の作家が分担した作品の連合体という形式をとって、ディケンズ自身が経営と編集にあたって毎週刊行した*All the Year Round*⁸⁾の1863年のクリスマス増刊号に発表された(*AYR*のvol. 10に収録されている)。ディケンズ以外の作家の担当になる章数とタイトルを掲載順に記すと、[第2章]“How the First Floor went to Crowley Castle” by Mrs. Gaskell (pp. 12-25 in *AYR*), [第3章]“How the Side-Room was Attended by a Doctor” by Andrew Halliday (pp. 25-31), [第4章]“How the Second Floor kept a Dog” by Edward Yates (pp. 31-35), [第5章]“How the Third Floor knew the Potteries” by Amelia B. Edwards (pp. 35-40), [第6章]“How the Best Attic was under a Cloud” by Charles Collins (pp. 40-46)ということになる。これらの5篇は*CS*を刊行する際に削除されるとともに、ディケンズ自身が担当した[第1章]“How Mrs. Lirriper carried on the Business” (pp. 1-12 in *AYR*)と[第7章]“How the Parlours added a Few Words” (pp. 46-47)を収録し、*AYR*の原文から6行カットして、*In Two Chapters*というサブタイトルを付けて刊行されたのであった。

*MLL*の主人公であるエマ・リリパー夫人(Mrs. Emma Lirriper)の夫の人となりは次のようである。

It is forty years ago since me and my poor Lirriper got married at St. Clement's Danes, My poor Lirriper was a handsome figure of

a man, with a beaming eye and a voice as mellow as a musical instrument made of honey and steel, but he had ever been a free liver being in the commercial travelling line ... and this led to his running through a good deal and might have run through the turnpike too when that dreadful horse that never would stand still for a single instant set off, but for its being night and the gate shut, and consequently took his wheel, my poor Lirriper and the gig smashed to atoms and never spoke afterwards. (370)⁹⁾

結婚して一年余りで(“ it was early in the second year of my married life that I lost my poor Lirriper ”)(372)旅回りの商人であった夫が、ある夜閉ざされていた通行税取り立て門に馬車ごと激突して死亡した40年前の出来事を説明しているリリパー夫人のこの語りが、どの程度までエリザベス・ディケンズのそれを反映したものあるでかは判断すべくもない。だが、恐らくは60歳代に乗っているかと思われるリリパー夫人の年格好と、負債を残して逝った(371)上に、ミコーバー氏(Mr. Wilkins Micawber)ばりの朗々たる声の響き¹⁰⁾を持ち合わせていた点に端的に示されているごとく、亡夫が作家の父親ジョン・ディケンズ(John Dickens, 1785-1851)の面影を宿した仕立てになっていること等を考え合わせると、リリパー夫人がエリザベス・ディケンズを彷彿とさせる人間像を備えた存在として創造されていることは明白である。そして、リリパー夫人が経営する下宿屋に居着くようになって13年になる、自称ジャクマン少佐(Major Jemmy Jackman)なる人物のいかにも紳士然とした態度で朗々たる話し振りを展開する物腰から察しがつくように、ジョン・ディケンズの彩り¹¹⁾が配色されていて、一層そうした印象が深まり強まってくる。ジャクマン少佐が金銭面で家主であるリリパー夫人の温情に依存しているとおぼしい設定

から、ますます顕著に浮き彫りにされてくるのである。

Such was the beginning of the Major's occupying the parlours and from that hour to this the same and a most obliging Lodger and punctual in all respects except one irregular which I need not particularly specify, but made up for by his being a protection and at all times ready to fill in the papers of the Assessed Taxes and Juries and that, and once collared a young man with the drawing-room clock under his coat, and once on the parapets with his own hands and blankets put out the kitchen chimney and afterwards attending the summons made a most eloquent speech against the Parish before the magistrates and saved the engine, and ever quite the gentleman though passionate. (378)

婉曲的で慎重な言い回しを通してではあるが、堂々とした紳士然とした風采とは裏腹に、ジャクマン少佐は下宿料の支払いが滞りがちの様子で、用心棒、代書人、法律顧問等リリパー夫人のために多方面に及ぶ労役を勤めることでその補いをしている存在に過ぎないように見える。リリパー夫人が主とすればジャクマン少佐が従という関係が両者の間にできあがっているということである¹²⁾。だから、懐が寒い上に得体が知れない風来坊を、その卑しからぬ人品と戦力としての卓越性を評価したリリパー夫人が、パラサイトたる実体を温情の下に黙認しているというのが、この両者をめぐる実相といったところである。亡夫の遺した負債を長い年月をかけてどうにか返済し終える(371)など苦労の辛酸をなめたりリリパー夫人が、部屋代の払いもままならぬ事情を大目に見てまでジャクマン少佐を下宿人として抱え続けたとは合点がいかない話しではあるが、一種のパートナーとして、精神的な支えと癒しを彼に多少なりとも求め期待した

からこそ、下宿人として置き続けたということはあったかも知れない。

そして、エドスン(Edson)夫妻がリリパー夫人の前に登場してきたのは、ジャクマン少佐が下宿人となって3年目の2月のことであった。夫が3ヶ月分の部屋代を前金で払い、更に同一条件で6ヶ月程借りたいと申し出た。登場してから3ヶ月経過した5月を迎えると、夫が突然避けられない用事ができたという口実の下に、身重の妻を置き去りにしてマン島へ旅立って行った(380)。その後夫からの短い手紙を二度受け取っただけのエドスン夫人が、ある6月の日暮れ時急に思いつめた様子で外出してテムズ河で投身自殺をはかろうとしたのを、気になって尾行したリリパー夫人がおしとどめる場面が出来する(384)。そして、エドスン夫人は出産で全力を使い果たした形で不帰の旅路につく。

Then I brought the baby in its wrappers from where it lay, and I says:

“ My dear this is sent to a childless old woman. This is for me to take care of. ”

The trembling lip was put up towards my face for the last time, and I dearly kissed it.

“ Yes my dear, ” I says. “ Please God! Me and the Major. ”

I don't know how to tell it right, but I saw her soul brighten and leap up, and get free and fly away in the grateful look. (387)

いかにもクリスマス作品に似つかわしい場面としか形容のしようがない感じではあるけれども、夫に捨てられた上に頼れる身寄りも知友等も皆無の寄る辺なき女性エドスン夫人が、リリパー夫人の「ジャクマン少佐と二人で責任を持って貴女の忘れ形見を育てる」という言葉を最期として、安心立命の澄み切った魂を持つ存在となって、天国へ飛び立っていったというのである。当然の流れ

として、エドスン夫人の忘れ形見たる男の子はファーストネームとしてジェミィという名前が、そして名字としてリリパーという名前が付けられたのである。正式にはジェミィ・ジャクマン・リリパーということになるが。

ジェミィが5歳の時に猿回しの後について歩いている内に迷子になる(390)という大事件が持ち上がる。

But what my inexpressible feelings were when we lost that child can only be compared to the Major's which were not a shade better, through his straying out at five years old and eleven o'clock in the forenoon and never heard of by word or sign or deed till half-past nine at night, when the Major had gone to the Editor of the *Times* newspaper to put in an advertisement, which came out next day four-and-twenty hours after he was found, and which I mean always carefully to keep in my lavender drawer as the first printed account of him. (389)

夜9時半過ぎになってもジェミィの行方がようとしてつかめないの(結局は迷子になっていたのを警察で保護されていた訳だが)、遂にジャクマン少佐がタイムズ紙に広告を掲載することにしたという、リリパー夫人と少佐との実の親というか実の祖父母以上とも思える程の心痛振り、うろたえ振りが説明されている。これを描写し叙述の筆を進めている作家の内面はどんなものであったろうか。鬼籍に入ったおのが両親との断絶した関係を考え、自己の手で家庭を割り家族を分裂させてしまった所業を思い、そして27歳も年齢差のある愛人エレン・ターナン(Ellen Ternan, 1839-1914)との思うようには進まない相互関係などを念頭に置いていたとすると、この厚い人情が十全に流露している人間関係の描写に、それこそ複雑かつ胸が締め付けられる心境と姿勢で取り組んで

いたのであろうか。リリパー夫人、ジャクマン少佐、ジェミィの三人は元々が赤の他人同士であるだけに、そうした想念が募るばかりであったろうか。

この後10歳を迎えてリンカンシャー州の寄宿学校に入るためにロンドンを離れるまでの、ジェミィを中心とする楽しく暖かい家庭風景が、リリパー夫人の下宿屋で繰り広げられたという。

In this way Jemmy grew and grew and went to day-school and continued under the Major too, and in summer we were as happy as the days were long, and in winter we were as happy as the days were short and there seemed to rest a Blessing on the Lodgings for they as good as Let themselves and would have done it if there had been twice the accommodation, ... (393)

祖母と名付け親と孫という配置になっている三名が構築する家庭に横溢する幸福感が、その舞台である下宿屋を包み込んで、大いなる繁栄をもたらしたと説明されている。

クリスマス休暇で帰省したジェミィの笑いが「暖炉の火と一体化している」(“he began to laugh in a sort of confidence with the fire”)(398)上に「音楽的である」(“...laughed again, musically”)(ibid.)と最上級の讃辞を捧げて、ジェミィがクリスマス精神の体現者であることを示す叙述に続き、一人の男の子とその友達のボボ(Bobo)がセラフィナ(Seraphina)とその妹とそれぞれ結ばれ、祖母と名付け親ともども使い尽くせない富にも恵まれたという、ジェミィが語るお伽噺を聞いた後、リリパー夫人と当のジェミィとの間で次のような問答が交わされる。

“And was there no quarrelling?” asked my respected friend, as Jemmy sat upon her lap and hugged her.

“ No! Nobody ever quarrelled. ”

“ And did the money never melt away? ”

“ No! Nobody could ever spend it all. ”

“ And did none of them ever grow older? ”

“ No! Nobody ever grew older after that. ”

“ And did none of them ever die? ”

“ O, no, no, no, Gran! ” exclaimed our dear boy, laying his cheek upon her breast, and drawing her closer to him. “ Nobody ever died. ” (401)

ここは ‘ my respected friend ’ という敬語表現からも明らかなように、ジャクマン少佐が語り手となって叙述が進められている箇所であるが、クリスマスと結び付いた夢物語とも奇跡物語とも受けとれる内容で、感受できることは作家の痛々しいまでに切ない愛と連帯を希求し願望することで、癒しと救済を求めてやまない姿勢というか内面状況である。

これまでの説明から自ずと察せられるように、*MLL*の殆どの部分は主人公であるリリパー夫人の一人称体による独白で展開されており、作者ディケンズがおのが複雑な意識を投影し反映するための内的独白を実験¹³⁾しているといっべくよいかも知れない。この実験的叙述法には先述したごとく他界した母親への想いと情念は当然のこととして、愛人エレン・ターナンへのそれも屈折した影を投げ掛けている¹⁴⁾ことも、指摘するまでもなく明らかである。妻キャサリン (Catherine Dickens, 1815-79) とは永遠に復縁するつもりはないと教区担当の牧師に明確に言明している¹⁵⁾ことを考えると、エレン・ターナンへ傾斜していく心的姿勢がディケンズの内でも抑えがたく増幅していくということはあったかも知れない。しかし、当代きっての作家であり大立者でもあるディケンズの庇

護を受けることは彼女自身にとっても、二人の姉と母親にとっても色々な面で大きなメリットとなったことは否定できないとしても、父親と娘程の年齢差がある上に、法律的にも社会的にも正式の妻の座には絶対に就けない日蔭の身が続くだけのおのが状態を考えると、軽佻浮薄なタイプではなくて着実冷静な判断力の持ち主であったと伝えられるエレン・ターナンとしては、ディケンズに対する感謝の念は当然抱いていたであろうが、愛とか癒しの情念ということになると蟠りがとけない屈曲したものがあつたのではないか。まして、ディケンズとの間にできた子供をフランスで秘密裡に出産しなければならず、しかもその子を乳児のまま亡くした¹⁶⁾となると、そうした心情は募る一方だったのであるまいか。妻キャサリンに対する積年の不満に端を発しているとはいえ、家庭を割り家族を分裂させる所業に出て厳しい指弾に晒されたのは致し方ないとしても、成人に達して巣立ちの時期を迎えている筈の息子達の凡庸さに心を痛め手を焼いていたディケンズとしては背徳者意識につき動かされつつ、罪の意識に懊悩するが故に却ってますますエレン・ターナンへと傾斜していかざるを得なかつたのではあるまいか。だが、肝心の相手の内面との間に距離と溝があり、癒しと慰めを希求する心情が一方通行かそれに近いものに過ぎなかつたとすれば、ディケンズの孤立感と寂寥感は深化することはあつても希薄化することはなかつたといつてよい。自作の公開朗読の巡業に狂奔した結果として3000人に及ぶ聴衆の熱狂的な反応にどれ程陶醉し、莫大な興行収益を手にして興奮し得たとしても、それは所詮一場もしくは一夜の夢といった瞬間的刺激性であり得ない話しである。このように見てくると、ディケンズにとってくつろぎと暖かみを覚え、多少なりとも神経の襞がほぐれ魂の飢餓が潤う場所は皆無に等しかつたとしかいいようのない感じである。かような暗然として荒涼たる風景の中の彷徨を逃れる術もなく自らの運命として引き受けざるを得ないディ

ケンズの心象風景に、帰らざる旅路についた母エリザベスに対する思慕の情が闇夜のマッチの明かりのごとく現出し、それが慈愛と連帯の顕現たるクリスマスにちなむ作品である *MLL* の主人公リリパー夫人の人間像に投影され影響を及ぼしていることは、十分に首肯できることとあってよい。そうなると、無に等しかった母親なる存在との和解をディケンズがなし得た事実を、リリパー夫人の創造が示している¹⁷⁾ことは申すまでもあるまい。虫がいい無定見の態度だといってしまうえばそれまでだが、母親の死去により生じた空隙とこれまで述べてきた寄る辺なき状態との相乗作用により母親に対する凍り付いた心情が影響を受けて、リリパー夫人の創造と彼女の語りによる叙述の展開との推進力の一端となり得たということである。リリパー夫人の語りを綴る作業を通して、ディケンズがどれ程の慰安と救済を得て内面世界の平安と晴朗を実現させ得たかは、全くもって想像の域を出ない話しではあるけれども。

[]

ディケンズは *The Uncommercial Traveller*¹⁸⁾ と題する随想集に収録されている37篇のエッセイ群の中で、12篇を1863年に *AYR* に発表した。以下掲載順にそのタイトルと日付を記すと次のようである（最初のローマ数字は37篇全体を通しての章数である）。

“ The Calais Night Mail ” (May 2)

“ Some Recollections of Mortality ” (May 16)

“ Birthday Celebrations ” (June 6)

“ The Short-Timers ” (June 20)

“ Bound for the Great Salt Lake ” (July 4)

- “ The City of the Absent ” (July 18)
- “ An Old Stage-Coaching House ” (August 1)
- “ The Boiled Beef of New England ” (August 15)
- “ Chatham Dockyard ” (August 29)
- “ In the French-Flemish Country ” (September 12)
- “ Medicine Men of Civilisation ” (September 26)
- “ Titbull's Alms-Houses ” (October 24)

なおこれ以外に、ディケンズはハウイト(William Howitt, 1792-1879)の心霊術や霊媒へ過度の肩入れを行う姿勢を今回は実名入り¹⁹⁾で正面から批判したエッセイを2篇*AYR*に掲載している。

“ Rather a Strong Dose ” (March 21)

“ The Martyr Medium ” (April 4)

これから*MLL*と同じくディケンズとの関連を中心として、上記のエッセイ群を対象とする分析と考察を行うこととしたい。

例えば母親の死後発表された第29章 “ Titbull's Alms-Houses ” の中に次のような記述がある。

When I recall one old gentleman who is rather choice in his shoe-brushes and blacking-bottle, I have summed up the domestic elegances of that side of the building. (297)²⁰⁾

靴用のブラシはともかく「靴墨瓶」を持ち出して、それを吟味する一人の老人の描写にそっと嵌め込んだ箇所であるが、ディケンズにとって「靴墨瓶」はもう免疫が出来ていたのであろうか。あるいは痛み、苦しみを抑圧して何かの意味を込めて持ち出したのであろうか。いうまでもなく12歳当時のウォレン靴墨工場の体験をまざまざと想起させ、冷え冷えとした心理状況を現出させる存在

であるからである。同工の夢魔的世界を喚起し得る力を持つ母キャサリンの死去により、心奥に封印し幽閉し続けてきたこの記憶に対する恐怖や嫌悪の呪縛が解けて、安堵と平衡がいささかでも実現したことを示す証左として、抑えがたく流露したのであろうか。母親の死とともに過去の出来事として余裕を持って見つめる姿勢が可能となったのであろうか。

UTの筆者であり語り手でもある無商旅人の本章における観察と思索の対象になっているティトブル養老院²¹⁾（女性が9人で男性が6人という収容能力を持つ）で支配的な死生観に言及している箇所がある。

On the occurrence of a death in Titbull's, it is invariably agreed among the survivors and it is the only subject on which they do agree that the departed did something "to bring it on." Judging by Titbull's, I should say the human race need never die, if they took care. But they don't take care, and they do die, and when they die in Titbull's they are buried at the cost of the Foundation.

(297)

養老院の老人達の死に行く者は本人にその原因があるのだという気休めに引っ掛けて、無商旅人は気を付けておれば死を免れることが可能というのなら人類は死ななくても済む筈だが、結局は気を付けないし、そして死を免れるはできないと綴っている。どう理屈を付けてあがいてみたところで、死を逃れることは不可能だという想いが認められているのである。死に臨むまでの母親の態度にティトブル養老院の老人達の態度が合わさったものが無商旅人、即ちディケーンズに投影されて、死を感受した意識が色濃く作動した叙述となっているのは確かである。同工の姿勢がやはり母親の死後発表された第28章“Medicine Men of Civilisation”の中の茶番劇と墮した葬儀を叙した箇所において看取され

る。

Other funerals have I seen with grown-up eyes, since that day, of which the burden has been the same childish burden. Making game. Real affliction, real grief and solemnity, have been outraged, and the funeral has been “performed.” The waste for which the funeral customs of many tribes of savages are conspicuous, has attended these civilised obsequies; and once, and twice, have I wished in my soul that if the waste must be, they would let the undertaker bury the money, and let me bury the friend. (285)

大人となって目撃した葬儀も、7,8歳くらいの幼児の時にかり出されてその徹底した茶番劇になじめなかった乳母であった女性の夫の葬儀(284)と同じく子供じみた幼稚な茶番劇で、真の苦悩や悲哀とは無縁の「演じられた芝居」であるとの記述がなされている。死後の葬儀が全くの見えすいた茶番であるとなると、空無感や暗澹たる想いが増すばかりであり、作者のおのが死への意識も濃厚に浮き出ているように感受される。

母親の死後に発表された文章をここまでは見てきた訳であるけれども、1863年のディケンズは3月26日のエッグ(Augustus Egg, 1816-63)の死を契機として喚起された肉親や知友の相次ぐ死去に対する慨嘆を吐露している書簡²²⁾に端的に見てとれるように、死への想念を母親の他界以前から深く抱懐していたことは明らかである。そうしたものは例えば第23章“The City of the Absent”で、シティにある墓地の周囲の路地で鳥かごに入れられている小鳥達を叙した箇所より感受することができよう。

Caged larks, thrushes, or blackbirds, hanging in neighbouring courts, pour forth their strains passionately, as scenting the tree, trying

to break out, and see leaves again before they die, but their song
is Willow, Willow of a churchyard cast. (236-37)

絶命して果てる前に鳥かごから脱出して木の葉を今一度見たいと熱望してもがき苦しみ悲鳴をあげている小鳥達の姿は、死の雰囲気には覆われているという以外にはいいようのない感じである。

死の影といえれば同じ章に下記のごとき描写が出てくる。

And again: possibly some shoeless boy in rags passed through this street yesterday, for whom it is reserved to be a Banker in the fulness of time, and to be surpassing rich. Such reverses have been, since the days of Whittington; and were, long before. I want to know whether the boy has any foreglittering of that glittering fortune now, when he treads these stones, hungry. Much as I also want to know whether the next man to be hanged at Newgate yonder, had any suspicion upon him that he was moving steadily towards that fate, when he talked so much about the last man who paid the same great debt at the same small Debtors' Door. (239)

ここで描き出されているボロをまとい履く靴もなく空腹で墓地の界隈をうろついている少年と、ニューゲート監獄で次に処刑されることになっている死刑囚が、12歳当時のディケンズの姿と記憶を投影したものであることは論を俟たない。ウィティントンのごとく未来の銀行家となる筈の浮浪児に靴墨工場で糊口をしのぎつつシティの裏通りをさすらっていた12歳当時の少年ディケンズの惨めな姿がまざまざと投影されていることは指摘するまでもなく明らかであり、次に処刑される順番にあるおのが運命に耐えている筈の死刑囚もそうである。特に彼の前に処刑された死刑囚が「債務者が通るドア」の所で「大きな債務」

を支払ったという言い回しに、12歳当時の例の債務者監獄をめぐる体験が投影されていることはいうまでもない。死の影と地獄を彷徨するがごとき苦勞をなめた記憶がアマルガムとなって出て来ている箇所である、と指摘できよう。

同工の記述が第21章 “ The Short-Timers ” においても見受けられる。

“ I can slip out at my door, in the small hours after any midnight, and, in one circuit of the purlieus of Covent-garden Market, can behold a state of infancy and youth, as vile as if a Bourbon sat upon the English throne; a great police force looking on with authority to do no more than worry and hunt the dreadful vermin into corners, and there leave them. Within the length of a few streets I can find a workhouse, mismanaged with that dull short sighted obstinacy that its greatest opportunities as to the children it receives are lost, and yet not a farthing saved to any one. But the wheel goes round, and round, and round; and because it goes round so I am told by the politest authorities it goes well. ”

(209-10)

AYRの事務室から深夜外に出てみると、警官が幼児を追い立てては路地に追い込むとそこで放り出して見向きもしない有様が、そして近くの救貧院でも収容している子供達に無関心で改善のためにびた一文使おうとしない状態が、目に映るばかりで。しかも当局はそうした状態をうまく回転して上々の成り行きだと吹聴する始末で。幼児達の放ったらかしの状態と、それに応じて獣同然のあさましく惨めな本能だけがむき出しになった姿が描出されているのである。この箇所に12歳当時のおのが姿を投影し重ね合わせて、ディケンズが想いを込めたタッチで筆を進めていることは申すまでもない。このように見えてくると、

靴墨工場と債務者監獄をめぐる過去は死滅するどころか現在に襲いかかって、その中核を形成している²³⁾ことと、作家の内面の深奥から発せられる「内面的な声」²⁴⁾となって、例えば*UT*の叙述を通して聴き取ることができる、ということが指摘できるといってよい。

同じようにディケンズの内面にがっしりと根付いて消しがたいイメージを保ち続けている存在として、第20章“*Birthday Celebrations*”で描かれている5,6歳の頃の若い恋人があげられる。

Olympia was most beautiful (of course), and I loved her to that degree, that I used to be obliged to get out of my little bed in the night, expressly to exclaim to Solitude, “O, Olympia Squires!” Visions of Olympia, clothed entirely in sage-green, from which I infer a defectively educated taste on the part of her respected parents, who were necessarily unacquainted with the South Kensington Museum, still arise before me. (200)

5,6歳当時熱愛していた若い恋人の幻影が*UT*を認めている51歳の時点においても、眼前に浮かび上がってくるという軌跡が描き出されているのである。本名をルーシー・ストラウギル(Lucy Stroughill)というこの若い恋人は、1859年発表の長篇*A Tale of Two Cities*のヒロインであるルーシー・マネット(Lucie Manette)の重要な構成要素を成しているし、1860年6月30日に*AYR*に発表された*UT*の第12章“*Dullborough Town*”において少女として、長じてからは無商旅人の竹馬の友の妻としても登場してくるという風に、ディケンズにかなりの感化と癒しを与え続けていることは明白であり、この箇所もその有力な証左となるものである。本章の描写の筆が更に進んで初恋の相手マライア・ビードネル(Maria Beadnell, 1810-86)がとりあげられる。

I gave a party on the occasion. She was there. It is unnecessary to name Her more particularly; She was older than I, and had pervaded every chink and crevice of my mind for three or four years. (202)

21歳の誕生日にパーティを催した時に「彼女」が出席していた。「彼女」はそれまでの3,4年間無商旅人の内面の全てに喰い込み、忘れがたい存在と化していたと記述されている。「彼女」とは無論マライア・ビードネルのことで、「彼女」だけで十分だ、それ以上は言いたくないという姿勢に、無商旅人、即ち作者ディケンズの、歳月の巡りが却ってその思い出とイメージを生々しく鮮烈なものにしている様相が感受されるのである。

Behind a door, in the crumby part of the night when wine-glasses were to be found in unexpected spots, I spoke to Her spoke out to Her. What passed, I cannot as a man of honour reveal. She was all angelical gentleness, but a word was mentioned a short and dreadful word of three letters, beginning with a B²⁵⁾ which, as I remarked at the moment, "scorched my brain." (203)

パーティが終わりかけた頃を見計らってドアの陰で「彼女」に愛を告白した（或いは端的に求婚した）ところ、相手にBで始まる三文字の言葉を浴びせられて（それも「天使のごときやさしさ」で）、説明不能の恥辱と衝撃を受けたという記述を通して、マライア・ビードネルに子供扱いされ一蹴された屈辱的な体験への言及がなされている。この後、痛飲することで何もかも忘却してしまいたいというよくあるパターンを描くこととなり、翌日の昼頃ガンガンと痛む頭を抱えながらベッドで目を覚ました時の心情は、又しても誕生日が「苦い」粉薬と失意と落胆の「苦さ」と結び付く軌跡を描いた（ "... to the bitter powder and the wretchedness again" ）(204)と説明されている。楽し

い筈の誕生日が期待を裏切られた真反対の「苦い」結果へと収束していくという、暗く絶望的な諦念といったものが吐露されているとあってよいだろう。

マライア・ビードネルをめぐる失恋体験を痛々しいまでに生々しく綴らざるを得ない状態にディケンズを至らしめた要因として、エレン・ターナンとの関係をあげることができよう。1863年1月18日付の書簡の中で「この手紙では説明できない心配事」(“an anxiety not to be mentioned here”)²⁶⁾のために不眠症に陥っていると、エレン・ターナンに起因すると思われる深刻な煩い事で眠れない夜が続いていると訴えているからである。既述したごとく、外聞をはばかり日蔭の存在に過ぎないとなれば、エレン・ターナンがディケンズの願望や期待にそうそう素直に応じていたとは到底思えず、遂には鬱屈した情念をぶつけてディケンズを懊悩させる場面も時としてあったのではないか。所詮エレンとの関係に救済とか癒しを期待すること自体があり得ない無理な話しに過ぎないということである。1863年の時点で24歳のエレンに不眠症に陥る程苦しめられたことの連鎖反応として、30年前22歳のマライアに子供扱いされて放り出された苦い記憶が蘇り、上記のような記述として紙面に刻まれるという経路を辿ったものと想像される。そして、その結果としてディケンズの無間地獄を彷徨している姿が炙り出されてくるばかりである。

第19章 “Some Recollections of Mortality” において、25年前（実際は23年前の1840年1月14日）の回想が描かれている。母親が一人で秘密の内に出産し、その数日後に息を引き取ったと推定される男の赤ん坊の検死法廷に陪審員として参加した時の記憶をめぐる記述が現出する。

When the agonised girl had made those final protestations, I had seen her face, and it was in unison with her distracted heartbroken voice, and it was very moving. It certainly did not impress me by

any beauty that it had, and if I ever see it again in another world I shall only know it by the help of some new sense or intelligence. But it came to me in my sleep that night, and I selfishly dismissed it in the most efficient way I could think of. (197)

殺人の嫌疑をかけられて被告となっている母親であるうら若き女性への並々ならぬ同情の念と、彼女が夢の中に現れ、それを尋常ならざる努力で追い払ったこと等が記されている。1837年5月7日の妻キャサリンの妹であるメアリー・ホガース(Mary Hogarth, 1819-37)の17歳での突然の死から僅か3年にも満たない時点での出来事であるので、どうしてもメアリー・ホガースとオーヴァラップしてディケンズの内面に喰い込み、異常とも思える程の痕跡、影響を記憶に残している感じである。メアリーは姉とディケンズの新婚家庭(1836年4月結婚)に同居していて、姉キャサリン以上にその活発で機知に富む人柄で義兄の心を魅了し傾斜させていたこと、観劇からの帰宅直後に突然急病で倒れ、翌日ディケンズの腕の中で帰らぬ人となり、悲嘆のあまり並行して執筆中であった*Pickwick Papers*と*Oliver Twist*の6月分の分冊の執筆をディケンズが中断したこと、翌1838年2月あたりまでメアリーの霊がディケンズの夢の中に毎晩のように登場してきたこと等は、今更説明するまでもない周知のエピソードである。うら若き被告が夢の中に現れるあたりにメアリー・ホガース体験との血縁性を強く感受させるこの検死法廷体験を、1863年の時点においてディケンズが“a very notable uncommercial experience”(198)と呼んでいるのも、むべなるかなといったところである。被告に弁護士まで世話をして温情的な判決が下るように尽力した程であるから、この出来事自体が無商旅人と自称するディケンズに忘れがたい強烈な印象と記憶を植え付けたことは論を俟たない。だが、メアリー・ホガースのダブルとしてディケンズにインパクトを与え、彼女を核と

する回想と思慕の情念を揺動し増幅する作用を及ぼしたからこそ、20年以上の歳月の巡りを経た1863年の*UT*執筆時において、生々しく鮮烈な叙述を作家が展開し得たことも、見落としてはならない重要な事実といってよい。

[]

帰するところ、メアリー・ホガースが20年越しの濃密で衰えを見せないオーラでディケンズを包み込んでいるということが、現実的には彼を支え癒してくれる存在が皆無である事実を意味していることは述べるまでもない。先述したように、一方的な片想いに終わった初恋の相手マライア・ビードネルを想起しているのも、1855年2月における22年振りの再会において、単なる中年のお喋り女と墮していた彼女を見て手ひどい幻滅を受けた有名なエピソードを踏まえての帰らざる過去を痛切な想いと郷愁を込めて回想している姿勢の表れであることは明白である。と同時に、ディケンズを覆う孤立性の表れであることも指摘するまでもなからう。妻キャサリンと愛人エレン・ターナンに関しては先述の通りである。長男のチャーリー(Charles [Charley] Dickens, 1837-96)を始めとする7人の息子達は、父親の意向に従って貿易商会や軍隊に入れられて異国に居たり、学校の寄宿舎に入ったりして父親の許を離れていた。二人いる娘の内ケイト(Kate Dickens, 1839-1929)は父親の反対を押し切る形の結婚をして家を出ていたので、娘メアリー(Mary Dickens, 1838-96)と姉キャサリンが去った後も義兄ディケンズと行動を共にして忠実に仕えてきたジョージナ・ホガース(Georgina Hogarth, 1827-1917)との二人だけが僅かに残っているだけであった。家庭を割り家族を分裂させたことの自業自得という面は当然あるとしても、淋しい限りの状況下にディケンズが置かれていた事実は否定で

きない。だから、自作の公開朗読会の巡業でどれ程莫大な収益をあげようとも、*MLL*が22万部も売れてクリスマス物の売り上げの新記録²⁷⁾を樹立しようとも、一時だけ孤独を忘却させる興奮剤に過ぎなかったことは述べるまでもあるまい。

かような状態にあったディケンズにとって、母エリザベスの死はどんな意味を持っていたであろうか。恐らく積年に渡り抱き続けてきた激しく執拗を極めた怨念と憎念は、完全に消え去ったとはいえなくとも、相当程度軟化してある段階までは許容する度量も芽生えていたのではあるまいか。エマ・リリパーなる*MLL*の主人公兼語り手の人間像は、そうした心理と意識が凝集され流露した物として、いうなれば「生前は不可能であった母親への斜に構えたオマージュ」²⁸⁾が託された創造といってよいと思われる。現実には信頼できて癒しを与えてくれる存在が殆ど居ない孤独な歩みをする中で、メアリー・ホガースの幻像と彼女との関わりに想いを寄せ傾倒しながら、*MLL*と*UT*の執筆に1863年のディケンズは取り組まざるを得なかったのである。そうした意味において、長年の友人でもありライヴァルでもあったサッカレー(William M. Thackeray, 1811-63)がこの年のクリスマス・イヴの日に他界したのは何とも象徴的である。1858年以来続いていた疎遠な状態を5月に修復したばかりであったのに、サッカレーは死去してしまったのであった。*Mrs. Lirriper's Lodgings*もその一つであるクリスマス物の作品をクリスマスが巡ってくると毎年発表し続けてきたことより端的に窺われるように、ディケンズがこよなく愛し心を寄せてきたクリスマスをもってしても、この作家を慰め癒す力と輝きを喪失してしまったことを、サッカレーの死とクリスマスとの結び付きは示しているとしか思えないからである。言葉を換えていうと、ディケンズの生の軌跡に、つまりクリスマス物の作品の創作に、随想集の執筆に、死の影が深く覆いかぶさり、その絶対的な力でディケンズを圧倒し呑み込み始めていたのである。

(注)

- 1) John Forster, *The Life of Charles Dickens Memorial Edition* (London: Chapman and Hall, 1911), vol. 1, p. 34.
- 2) 拙著『魂の彷徨 ディケンズ文学の一面』(溪水社刊, 1998), 68頁。
- 3) *Christmas Stories* (The New Oxford Illustrated Dickens, Oxford University Press, 1964), p. 295.
- 4) 拙著, 上掲書, 105頁。
- 5) 以下 *MLL* と略す。
- 6) 1863年9月14日付のW. H. Wills宛の書簡の中で “ I have begun at the Xmas No., and the title is Mrs. Lirriper's Lodgings. ” と述べている (*The Letters of Charles Dickens*, vol. 10 1862-1864, ed. Graham Storey [Oxford: Clarendon Press, 1998], p. 289)。
- 7) 以下 *CS* と略す。
- 8) 以下 *AYR* と略す。
- 9) *MLL* からの引用は本文、頁数ともThe New Oxford Illustrated Dickensの *CS* による。
- 10) ミコーバー氏がジョン・ディケンズをモデルとしているのは周知の事実であるが、*David Copperfield* (1849-50) の第11章で初めて登場してきた際の彼についての説明の中に “ a certain condescending roll in his voice ” (*The New Oxford Illustrated Dickens*, Oxford University Press, 1987, p. 156) という朗々たる声についての描写がみえる。
- 11) Gwen Watkins, *Dickens in Search of Himself: Recurrent Themes and*

Characters in the Works of Charles Dickens (Houndmills: Macmillan, 1987), pp. 39-40.

12)Deborah A. Thomas, “ Dickens' Mrs. Lirriper and the Evolution of a Feminine Stereotype ” in *Dickens Studies Annual*, vol. 6, ed. Robert B. Partlow, Jr. (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1977), p. 163.

13)Deborah A. Thomas, p. 161.

14)Cf. Deborah A. Thomas, p. 166.

15)1863年10月28日付のJoseph Hindle牧師宛の書簡の中で “ ... when we took our separate courses I took mine forever ” とディケンズは述べて、キャサリンとの復縁を否定している (*The Letters of Charles Dickens*, vol. 10, p. 305)。

16)エレン・ターナンがディケンズの子供を宿したのが1862年の秋で、出産と乳児の他界は1863年の夏であると推定されている (Cf. John Bowen, “ Belle and ‘ His Boots ’ : Dickens, Ellen Ternan and the *Christmas Stories* ” in *The Dickensian*, vol. 96, 2000, pp. 202-07) 。

17) “ Mrs. Lirriper ... is his [i.e. Dickens's] reconciliation with the mother who had for so many years meant nothing to him. ” (Gwen Watkins, p. 69) .

18)以下UTと略す。

19)ディケンズは1858年AYRに発表した12番目のクリスマス作品である *The Haunted House* の中で、名前は伏せる形でハウイトに対する批判と攻撃を加えたことがある (拙著『チャールズ・ディケンズとクリスマス物の作品群』[溪水社刊, 1994], 57頁) 。

20) *UT*からの引用は本文、頁数とも *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces* (The New Oxford Illustrated Dickens, Oxford University Press, 1964)による。

21) 架空の名前で、当時マイル・エンド・ロード沿いにあったヴィントナーズ養老院 (Vintners' Almshouses) がモデルであろうといわれている。

22) 1863年4月22日付のWilkie Collins宛の書簡を参照のこと (*The Letters of Charles Dickens*, vol. 10, p. 238)。

23) Harry Stone, *The Night Side of Dickens: Cannibalism, Passion, Necessity* (Columbus: Ohio State University Press, 1994), pp. 247-48.

24) “an autobiographical voice” (Albert J. Guerard, *The Triumph of the Novel: Dickens, Dostoevsky, Faulkner* [New York: Oxford University Press, 1976], p. 139).

25) 「Bで始まる三文字の言葉」とは“bah”か“boy”のどちらかであると思われる (田辺昌美著『*The Uncommercial Traveller* 研究 Dickens文学の一つの完成』[第一学習社刊, 1969], 195頁を参照のこと)。

26) Sir Joseph Olliffe宛の書簡の中にある言葉で、“Probably concerning Ellen Ternan”という注が付けられている (*The Letters of Charles Dickens*, vol. 10, p. 196)。

27) *A Dickens Chronology*, ed. Norman Page (Houndmills: Macmillan, 1988), p. 114.

28) “some kind of oblique, posthumous tribute to Mrs. Dickens” (Peter Ackroyd, *Dickens* [London: Sinclair-Stevenson, 1990], p. 936).